見えない笑顔～Everlasting～

由奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見えない笑顔～Ｅｖｅｒｌａｓｔｉｎｇ～

【Ｎコード】
Ｎ８２２６Ｃ

【作者名】
由奈

【あらすじ】
１３歳の由奈はチャットの人に恋に落ちてしまう。失ってから気付いてしまった由奈の心を救い出してくれたのはあの人だった…読みにくくて長いと思いますけど是非読んでみてください辛口コメントも大歓迎です感想を聞かせてください。

第1章　綺麗な空

この世界に永遠なんてない

君に出逢うまではずっとそう信じてきた

どうしてあたしは愛しい君を傷つけちゃったんだろう？

君を失ってから後悔しか残ってないよ

瞳にうつるもの全てが綺麗じゃない

君を失ってから気付いた

君といる世界は一番眩しいと・・

ねぇもしもあたしの声が聞こえるならもう一度声を聞かせて

君との出逢いは誰にも言えない出逢いだったね

『ごめん。もう俺たち無理だよ』

別れは突然。

予想もしてなかった

あたしは芹澤由奈。今年中学生になりました。

そしてこの彼が

田中宗太郎。
違うクラスだけど小学生の頃ウワサになるほど仲が良かった
宗太郎は軽そうだけど結構純情者。

クラスの人気者だ。

そして5月思いもよらず宗太郎に告白され付き合うことになった。

なんとか上手く続いてた。嫉妬したりもした。
そして6月
別れを切り出された
1ヶ月しか付き合ってないのに・・・

ショックだった。
『奈央ー！！』
あたしの親友。
神谷奈央。
かなり人気者。
スタイルも良いし美人だ。
『どうしたの？』
奈央はすごく優しい。
『宗太郎に別れようって言われたー！！』あたしは今にも泣きそうだった
心の穴が空いたみたいだった
奈央はそんなあたしに気づいたのか
『由奈！トイレ行こう！！』
急いで奈央はあたしの手を引きトイレに連れてってくれた
前がよく見えなかった。涙が今にも溢れそうだったから
『どうして？だってあんなに仲良かったのに』

優しく背中をさすってくれた
『だ、だって急なんだもん！！あたしだって1ヶ月で終わるなんて
思ってもいなかったんだもん』
いつのまにか奈央の瞳には涙が溜まっていた。
『辛いよね』
頭を優しく撫でてくれた
嬉しかった。

部活は剣道をやっているけどでもそんな気分じゃなかったから休んだ
お父さんとお母さんは両方働いてるから夜にならないと帰ってこない

あたしはひたすらベッドで泣いていた
なんとか気を紛らわそうとして何かしようと思った。
瞳に映ったものはパソコンだった
確かチャットって楽しいって聞いたことがある
気が紛れるかもしれない・・
チャットを探した。
最初よく分からなかった。
適当に部屋に入った名前は偽名で。
＞管理人：麻衣さんが入室しました！！＜

へぇこんな感じなんだ。

（絵里：こん♪）

（祐樹：どうもっ！！）

祐樹と絵里・・・
誰？？

チャットの人は顔が知らない人が多いんだ！！
一応あたしは
（麻衣：こんにちわ）

（絵里：麻衣ちゃん何歳ー？？）
年齢？？
正直に答えた
（麻衣：１３歳です）

（絵里：タメだあ♪宜しくね）

（祐樹：俺だけ違うじゃん！ちなみに俺は１８歳！宜しくな！）１８歳・・・
５歳違うんだ。＞絵里：年上じゃん！！＜

チャットをしているうちに嫌なコトも嘘のように消えていった。
その後も楽しく喋り続けた。
絵里は塾でやめ祐樹と二人きりになった
祐樹が突然
＞祐樹：麻衣・・あのさ！メアド交換しない？？＜

ねぇこれが確か二人の始まりだったね
こんな恋愛の仕方は望んではいなかったよ。でも傷ついてるあたしを祐樹は優しく聞いてくれたね
顔も知らないのに
そんな祐樹にあたしは何一つも出来なかった逆に祐樹を傷つけてしまったね
＞麻衣：え？？でも＜

あたしはそんなの考えもしてなかった

＞祐樹：お願い！！＜

それであたし達はメアドを交換した。
最初はしつこい人そう思ってた。

何回かメールをしてた。
そして祐樹から
［ねぇ写メ交換しない？？］
あたしはビックリした。
そして急いで自分の写真を撮った。
何やってるんだろう・・あたしは・・
可愛いくもないのに・・
さっき撮った写真をメモリーから消した
祐樹から
［やっぱりダメ？？］
あたしは考えて
［うん。あたし祐樹が思ってる程可愛くないし］
すぐに祐樹からメールが来た
［大丈夫！！俺も格好良くないし！］
少し間を開けて自分の写真を撮って祐樹に送った。
なかなかメールが来なくて不安になったその時
［ごめん！遅れて！可愛いじゃん！］
そして祐樹の写メが送られてきた

あたしはビックリした・・
祐樹がすごくあたしには輝いて見えたから・・

しかもあたしの好みだった。

ねぇ…これは神様がくれた運命??それとも必然なのかな??

「あたしの好みだよ!格好良いじゃん!」

祐樹と何回かメールし電話のやりとりもした。

でもあたしの笑顔の裏には苦しみがあったんだ。祐樹には言えない。
だって誰にだってあることなのに…

部活で悩まされてた。
先輩ともあまり仲が良くなくて…

先輩と顔を合わせるのも憂鬱な日々だった。

そんなあたしは
《死にたい》
とかも考えてた。

何度もカッターナイフを自分の手首に持ってきてはためらって泣く
ばかりだった

あたしは弱い…

死ねば楽になんかならないのは知ってる。
テレビの見すぎかもしれない…
あたしは本当に弱い人間だ…

日が過ぎていく程あたしは誰かを傷つけてた。ーそして5月

祐樹に告白され付き合うことにした。

誰にも言えない・・

きっと…

奈央にも…

会えるのかも分からない…

見えないよ

笑顔が…

今見たくても祐樹が見えない…

見えない笑顔。

憂鬱な日々はかなり続いた。

あたしはどうにもならなかった

下校中、祐樹から電話が来た。

「あのさ‥今度会わない??」

あたしはビックリした。

でもなんか怖い…

あたしは少しためらった

そして嘘をついた

「ご、ごめんね!!その日は親と用事があるんだぁ」

「そっか‥」

残念そうな祐樹の声‥胸が痛み出すよ。

ー6月

あたしは誰かを傷つけることを覚えてしまったかもしれない。

また誰かを傷つけてしまった…

ごめんね‥あたしもおさえられないこの感情に悩まされていた。

もしかしたら祐樹まで傷つけてしまうかもしれない…

怖かった…

苦しかった…

あたしは決意した。

祐樹と別れる　ー

傷つけたくないから…

［祐樹、別れよう］

すぐ返事が来た

［そうだね。俺たちあまり上手くいってなかったみたいだし］

少し寂しかった…

ついあたしの本音が出てしまった。

［祐樹の為にも良いと思って］

最低だ…

なにも知らない祐樹に対してこの言葉はまるで祐樹のせいにしている言葉だ…

傷つけてしまった…
メールが来た

［ちょっと待って俺のために別れるなら話し合おうよ］

あたしは無視した…祐樹と話すことでまた一つ傷つける…

何度もメールが来た
全て無視した

祐樹から電話もメールも来ることは無くなった

アドレス帳から削除した。

あぁ…もうこれで終わりなんだね

瞳には涙が溢れてた

祐樹ごめんね…

なんとか学校は行った

気を紛らわす為

ある日同じクラスの男子に

「あのさ～オレの部活友達がお前のコト好きなんだって！」

今はそんなの興味が無かった

「ふーん…」

男子はビックリしたような瞳でこっちを見た

「何だよ！お前：何かあったの？？」

優しいね…

でもあたしがいけないんだ：

あたしはわざと笑顔を作り

「何でもないよ！！全然大丈夫だから！！」

男子が少し間をおいて行った

「お前、顔に出すぎ：何かあったんだろ。よし！！今日は一緒に帰ろ！」

あたしはそんな健太の優しさが大好きだよ。

柏崎健太は保育園の頃からの幼なじみ。家がとなりだって事もあって仲良し。

「え??でも健太・・部活は??」

笑いながら

「平気!!ってかお前気にすんな!!俺様が送ってやるって言ってんだから!」

あたしは健太がいて良かったと思うよ

放課後

健太は日誌を書くと言うことで誰もいない教室で1人椅子に座って外を見てた

そうすると健太が走ってきて

「ごめん!!先生が字下手とかうるさくて!!帰ろ!」

あたしに健太は微笑んだ

通学路を歩いている時、沈黙が続いてた

そして沈黙を破ったのは健太だった

「あのさ、言えなかったら言わないでいいんだけど…今日どうしたの??」

あたしは少し間をおいて

「彼氏と別れた！！あたしから別れようって言ったの！！」

精一杯の笑顔を作った

「なんで・・由奈から別れようって言ったのになんでお前が苦しまなきゃいけないの？？」

こんなにも心配してくれる人がそばにいるんだ

「あのね…あたし最近、憂鬱でね毎日がもう楽しくなくなっちゃったんだ・・しかもたくさんの人を傷つけちゃって…きっと大事な人まで傷つけちゃうと思って・・」

気がつくと健太は肩を貸してくれた

「健太…今日はありがとう・・」

健太は照れ笑いをしながら

「気にすんな！」

あたしは嬉しかった

「健太…今日ね待ってるとき空が輝いてなかった‥」

健太は真剣な顔をしながら

「俺なら綺麗な空を見せてやる自信あるよ。俺をその元カレのかわりにしてもいいよ…ごめんな‥お前が傷ついてるのにこんな事言っちゃって」

健太…嬉しいよ‥

「健太は健太で見ていたいの…もう少し待ってて」

最後のチャンスを信じてみよう…

確か前の携帯に祐樹の電話番号載ってたよね‥

急いでボタンを押しかけた

長いコール

「はい…」

祐樹の声だ‥

「あ、もしもし…由奈だよ?」

祐樹にだけはあたしの本名を教えた

「あ、うん…」

怒ってるよね??勝手な女かもしれない‥

「もう一度やり直したいの…」

祐樹はすぐ答えを出した

「もう由奈に振り回されたくないから‥それに勝手すぎだよ‥」

声を押し殺して泣いてた

でもこのまま祐樹の前で泣いてたら祐樹を困らせる…

そう思ったから

「うん…分かった‥じゃあね」

精一杯の声を出して携帯を閉じた

本当に終わっちゃうんだね…

重たい足で学校に向かった

「おはよー！！」

奈央が飛びついてきた

でもあたしはいつもみたいな気分にはなれなかった

「おはよ‥」

奈央が顔を覗き込み

「どうしたー??具合でも悪いの??」

奈央…ごめんね‥あの時、奈央に言えなくて

「朝ご飯を食べ過ぎたー！！」

無理やり笑顔を作って答えた

「そっか‥」

少し悲しそうな顔をして頭を撫でてくれた

放課後、部活は休み健太の部活が終わるのをずっと待ってた

「あぁ…暇だなぁ‥

まだ1時間もあるなー…」

携帯のディスプレイを見た
もう祐樹からかかってくることは二度とない…
1人でたたずみボーっとしていた

「あ、由奈ちゃん！！」

あたしは振り向くと笑っている
桜木未歩がいた。
未歩は小学校の頃大の仲良しで今はクラスが違うけど部活は一緒だ。

「あ、未歩！！」

その場にしゃがみこみ

「今日、部活どうしたの??」

あたしは急いで答えた

「あ、具合が悪くて！！ごめんね」

未歩は微笑み

「大丈夫??ゆっくり休んでね」

と言い体育館に行ってしまった

「由奈、ごめん！！待たせた？？」

あたしは

「ううん！！全然！！」

と笑って言った

その時、携帯が鳴った

【着信：お母さん】

「もしもし？？」

お母さんは声を震わせながら

「今、何処にいるの？？」

あたしはすぐ

「学校だよ」

と言った

「な、奈央ちゃんがじ、事故にあって重体なの！！」

あたしは一瞬耳を疑った

でもお母さんが冗談でこんな事言うはずない…

奈央！！
どうして??
「今何処?」
「え?」
「今、奈央は何処なの?」
隣にいる健太もビックリするほど怒鳴ってしまった
「〇〇大学病院だけど‥」
あたしは急いで走り出した
「おい！！ちょっと待てよ！！」
健太が手を掴んだ
「行かなきゃ…奈央の所に行かなきゃ！！」
「何があったんだよ！」
あたしは泣きながら
「な、奈央が事故にあって重傷なの！！〇〇大学病院に行かなきゃ！！」
健太がチャリを持ってきて
「乗れ！！後ろに」

「でもここ学校だよ？バレたら…」

「そんなのどうでもいいから！」

健太は怒鳴った

あたしは後ろに乗り冷たい風にあたりながら行った

奈央…ダメだよ…

頑張って！！

病院に着き急いで向かった

奈央のお母さんがこっちに来た

「由奈ちゃん…来てくれてありがとう。奈央ね…瞳覚ましたよ」

あたしはビックリした

嬉しかった

その場で泣き崩れた

奈央がいる病室に健太と向かった

「奈央ー…開けるよ？？」

返事はなかった

入ると奈央は窓の外を見つめていた

暗い夜空を…星の欠片もない夜空を…

「奈央…」

その声に気付いたのかゆっくり振り返った

「由奈…」

あたしは涙を流しながら

「よ、良かった!!無事で!」

奈央は微笑み

「ありがとう…」

奈央は健太の方を見て

「健太君も来てくれてありがとう…」

2人で帰った…

「ねぇ…健太、昨日の返事言ってもいい??」

健太は歩くのを止めこっちを見た

「うん」

真剣な表情だった

「あたし…今なら健太を見れる気がする…だから…その…」

健太は笑いながら

「じゃあ良いってコトだな！」

あたしは照れ笑いをしながら

「うん」

そう答えた

ねぇ…健太…

あたしは健太がいることを心の底から感謝するよ

ー12月

健太とは長く続いた

「さみぃー！！」

あたしは自分のマフラーを健太の首に巻き付けた

「風邪ひくとダメだからね！！」

健太は照れ笑いをした

「なぁ…由奈…クリスマスは街とか混みそうだから海行く??」

あたしは微笑み

「なんで海なのよ??」

健太は照れくさそうに

「綺麗な空見れそうだから…」

2人は照れながら笑った

ねぇ…

祐樹はもう恋人できた??

一緒に笑って涙流して永遠を誓える人ができた??

あたしにはちゃんと大切な人がいます

祐樹を失って気付いたあの日悲しみから救ってくれた優しい人

『ありがとう』のたった一言じゃきっと伝えきれないよ

奈央はまだ入院中だけど体を動かせるようになって今リハビリをしている

「奈央〜」

奈央は微笑んで

「来てくれてありがとう…」

あたしは首を横に振って

「奈央の大親友ですから♪」

2人は笑い合った

「ねぇ由奈。あたしね冬休みあけたらまた学校行けるんだぁ」

あたしは驚いた

「本当っ！？嬉しいよー奈央と一緒にいられるなんて」

嬉し涙を流してしまった

「もうー泣き虫なんだからー」

奈央は手で涙を拭ってくれた

「だ、だってぇー」

優しく微笑み

「あたしね由奈に出逢えて本当に良かった！！由奈が隣にいてくれて嬉しいよ」

あたしは涙を流してた

言葉に感動をしてた

「まじー??やったじゃんよー」

すぐ健太に電話をした

「うんーあたし嬉し涙流したもん!」

「まじかよーお前涙腺ゆるいなー」

30分くらい電話をして病院から出た

「今日も寒いねー」

独り言…

なんか笑えるね

そしてクリスマス

きっと街にはカップルが愛を灯し合っているんだよね

「おい!!由奈!!」

健太は鼻を真っ赤にしながら待ってた

「ごめんね!!待たせちゃって!!」

健太はニコッと微笑み

「いつもより可愛いなぁー」

あたしは笑いながら健太の手を繋いで海に向かった

ねぇ…幸せだね…

第1章　綺麗な空（後書き）

自分の実話と少しフィクションを入れました。是非読んでみてください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8226c/

見えない笑顔〜Everlasting〜

2010年10月28日08時50分発行